

第四十五回中央教化研究会議 基調講演

三・一 後の生き方を考える

内山 節

内山先生の略歴を会議資料の七ページに掲げさせていただきましたので、すでにごらんをいただいているかと存じますが、昭和二十五年に東京にお生まれになられまして、二十代の頃から東京と群馬の両方に拠点を持たれて生活をされておられます。あるいは群馬のお話なども今日は伺えるかと思えます。NPO法人森づくりフォーラム代表理事等々を務められておられます。平成十二年四月より立教大学大学院二十一世紀社会デザイン研究科の教授をされておられます。

著書に『怯えの時代』『文明の災禍』『共同体の基礎理論』、『ローカリズム原論』等々がございますが、私は、『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』という本を数年前に読ませていただいて、それがとても印象深く残っておりますのでございますが、よけいなことを申しました。では、内山先生、よろしくお願いを申し上げます。

ご紹介いただきました内山です。日蓮宗の集まりでお話するのは始めてでございます。元々私は西洋哲学の人間なんですけれども、西洋哲学も、二十世紀になってきますと、西洋的な哲学の考え方がいいですか方法論っていうか、それに対する懐疑がいろんな角度から広がってまいりまして、ですから、今、現代哲学を行っている人間は、

「西洋哲学を勉強している」って言いましても、例えばカント哲学を専ら専門にしているかとか、ギリシャ哲学を専門にしているかとか、いろんなかたいらっしやいますけれども、現代哲学を専門にしている人間たちについて言えますと、二十世紀の哲学は大なり小なり東洋系の思想の影響を受けたといえますか、取り込んできたという、そういう歴史がございます。ですので、今、西洋哲学系の現代哲学やってる人間は、西洋哲学って言っているのか、よく分からないといえますか、そんな感じの時代を迎えてきております。

ですから、私の好きな哲学者で、大体百五十年ぐらい前に活躍されたかたですけども、ドイツのショーペンハウエルというかたがいらした。ショーペンハウエルは最後に『自殺について』という短い本を書いて、本当に自殺をしようんですけども、その中でどんな書き方してるかって言うと、「生の本質は無である」と、「死の本質も無である。であるならば、生と死を分ける理由が自分には分からない」という、そんなようなことも書いてたりします。この言い方が正しいかどうかはともかくとしまして、ショーペンハウエルが無であると言うというのも、やはり仏教から学んできたもので、ですから、すでに百五十年ぐらい前から、哲学っていうのはそういう傾向にきたりしております。

その話とはかくといたしまして、本日のテーマは、「三・一一以降、どういふふうを考え、また行動していったらよいのか」というテーマで、もう少しお話をさせていただければっていう気がします。その三・一一の、現実とか直後のこととかはともかくといたしまして、それから一年半余りの、「余り」というのは、もうちょっと早いかなって気がしますが、ほぼ一年半がたったと。その一年半がたつてる間に、私自身は、日本の社会はずいぶん変わりはじめたというふうに思っています。もちろん、表面的には変わらないことはたくさんあるんですけども、人々の気持ちの中に、何か根本的なものを変えていかないと、この社会ももたなくなつたし、私たちももたなくなつたのではないかと、そういう思いがずいぶん広がってきてるっていう気がいたします。ですので、この何が変わりつつあるのか

というようなことも含めまして、少しお話しさせていただければというふうに思っています。

三・一以降のいろいろな動きとこのを見ておりました、私は二つの特徴があるような気がいたします。一つは、冒頭にもレジュメに書きましたように、いろいろな新しい試みが始まっているという、そういう一面と、もう一つはある意味での、伝統回帰ととってもいいし、日本の社会が持っていた伝統的なものの再発見、そういう動きが重複しているような気がいたします。今、「日本の伝統的な」という言葉を使いますと、それを一番受け入れない人々は、人によってももちろん違いますけれども、世代的には、戦後の時代を、青年時代であったり中年時代であったりしますが、特に高度成長期を、そういう青年、中年で過ごしてきた人たちが、一番受け入れないという感じがいたします。それに対して、そのあとの世代、例えば今日の二十代ですとか、三十代ですとか、そういうかたがたになってきますと、日本の伝統とは何かということをよく知らないんだけれども、何かそういうものに魅力を感じてる、そういう一面を持っていて、実に不思議な現象みたいなものが起きてきているような気がいたします。

たとえば、私もたまに山に登る。たまに山に登りますと、今は比較的、定年世代ぐらいのかたがたの登山というのが大変人気があって、そういうかたがたがグループを組んで山に上がってくる。その一方において、最近、「山ガール」なんて言葉もありますけれども、比較的若い世代のかたがた山に登ってくる。そうすると、ずいぶん雰囲気違って、やはり定年世代のかたがたは、山に上がって自分の力を確認している。つまり登頂に成功をしたと。自分たちが山を、ある意味では征服したという、そういう感じで山頂に行つて記念写真撮ったりして騒いでいるという。それに対して割に若い人たちのほうは、山の山頂に上がって、何となく自然の力を感じたり、あるいはそこで、人によつては山の山頂で手を合わせていたり、別にそういうことをよく知っているわけではないんだけれども、どことなく山というか自然というものに対して、い敬の念を持っているんです。そういう雰囲気を持ってるのが、むしろ若い人です。そういうふうな、ずいぶん違う雰囲気が出てくるような気がいたします。

私は、日本の社会との比較地という形で長い間フランス語を使ってきましたので、フランスには一年にいったんぐらいいって、ちよつと向こうのようすを見てるっていう感じですけども、地方で先ほど紹介されましたように、二十歳ぐらいから群馬県の上野村という山間地域にだけ、東京にいたり上野村にいたりという二重の生活をしております。上野村と言うと、八月に日航機が墜落したというニュースが毎年報道されている、あの山間地域の村でございます。

なぜ上野村に行ったのかって言いますと、子どものときからやっていた魚釣りの関係で、上野村に魚を釣りに行っただけなんですけれど、魚釣りに行きましたところ、何となくこの村の雰囲気と、何かこう、合うものを感じていいいますか、良いものを感じていいいますか、それで、この村に住んでみたいなっていう気分になって、以降上野村に一応畑とわずかな山と持って暮らしてはいるんですけども、残念ながら仕事の都合もあって、上野村にいたり東京にいたり、そういう生活を四十年間ぐらい続けております。

元々上野村に参りましたのも、そういう魚釣りですから、フランスに参りましたが、やっぱり時々釣りがしたくなくてきて、一番初めに行ったときにはセーヌ川でも釣りをしたんですが、セーヌ川の釣りはまことにつまらない。ですから少し、良い川を探して、農村に行ったり山村に行ったりという、そんなことも、かたわらしておりました。フランスでも農山村に行きますと、とても良い農山村が沢山あるんですけども、ただやはり向こうを歩いていて、日本の社会とフランスの社会は、やっぱり根本的なものに違いがあるということを感じます。それはどうということかといえますと、例えば、「社会とは何か」という言葉を使ったときに、フランスにおける社会観は、生きてる人間たちによつて構成されているのが社会です。ですから、例えば「自治」って言葉を使った場合でも、原理的には大変簡単であります。生きてる人間たちだけで社会ができていますから、そうすると、生きてる人間たちがよく議論をして、自分たちのルールを決めて、そしてそれを実行に移せば自治になるわけで、もちろん、これを、実際にやろうとした

ら、みんなの意見まとめていくだけでも大変ですけれども、原理としては簡単だということがいえる。

それに対して日本の社会観はどんなもんだのかと言うと、決して生きてる人間だけによってつくられていくのが社会ではなくて、生きてる人間と亡くなったかたと、それから自然という、その三つの構成メンバーによってつくられてきたのが、日本の人たちが描いていた社会観だったというふうに思っています。ですから、よく、「日本の社会は自然と人間の社会だ」という言い方をいたしますけれども、その人間のほうも、生きてる人間だけではなくて、亡くなったかたがたを今なおこの社会の構成メンバーとしている。だから何かにおいて、一時にご先祖様に手を合わしたり、ご先祖様に報告をしたり、あるいはお盆になれば、「ご先祖様が帰ってくる」と言って行事をしたり、結局、絶えずそういうことをしながらきた。ですから、実際には日本の自治ってのは大変めんどくさいわけで、なぜならば、自然の意見も反映させなければいけないし、亡くなったかたがたの意見も反映させなければいけないってことになってくるわけで、そうすると会議をしても参加してくれない人たちを含めて意思決定をしなきゃいけない。

もちろん、最終的には生きてる人間たちが意思決定をするしかないわけですが、生きてる人間たちが、自分たちの論理だけに開き直ってはいけません。生きてる人間の論理だけで、それを絶対化して自分たちの社会づくりをしてはいけません。絶えず、自然が何を求めているのか、それからまた、「死者たち」って言うてもいいし、「先輩たち」と言うてもいいし、あるいは、「この社会をつくってきた、もとの人たち」って言うてもいいですけど、そういう人たちが今、何を求めているのかという、そういうものもある程度推し量りながら自分たちの社会を形成しなければいけないというのが、日本の伝統的な社会観であったというふうには私は思っています。

ですから、そこで自治をやろうとすると、今、言ったように大変ややこしいことになるわけで、結局どういうことかと言うと、そこに絶えず行事を持ち込むことによって、生きてる人間たちが自然とか死者の、分りやすくいえば、

代理人的な役割を果たしていく。そういう形をつくらなきゃいけなかった。ですの、例えば私がいる上野村ですと、八月の夏祭りに神社でお祭りがあつたりしますけども、夏祭りの行事としては、「川下げ」といまして、神社はちよつと高台にあるのですが、その高台にある神社から、みこしを担いで下りてきて、それで川の真ん中にみこしを置くとという、そういうやり方をとる神社が非常に多いのです。これ、「川下げ」というふうに言ってるんですけど、もちろん川の真ん中にちよつと台を置きまして、水につからない程度のとこにみこしを置くわけですが、そうすると、神主さんが川の中に入りまして、下流に立つて、で、上流側にみこしを見ながら祝詞をあげるといふやり方をとっております。

どういふことかと言うと、山の中の川ですから、くねくね曲がってるんですけども、不思議にそこにみこしを置くと、正面の山からまっすぐに水が落ちてきてるように見える、そういう感じがするようなどころにみこしを置く。そこで前の山を見上げますと、それが山の神が守ってる山で、そこから水が落ちてきてるついでに感じるわけですけども、その水源は水の神が守っている。

で、山の神と水の神に守られて自分たちの里があつて、それで周囲を眺めると、人々が造っている家があつたり畑があつたりするわけで、つまりわれわれの生きてる世界は、山の神とか水の神に守られてこそ成立するという、それを確認していくというのが、うちの村の夏祭りの多くの形式でもあります。もちろん、山の神とか水の神といつても、「それが本当にいるのかどうか」とかいわれても困るわけですけども、そういう行事を通しながら、私たちの村といふのは、自然に、森に守られ、そしてまた、そこから滴り落ちてくる水に支えられて展開するんだと、だからそのことを決して忘れてはいけないということを、祭りを通して再確認していく。ふとそういうことを忘れかけて、ごうまんなりそうになつて自分たちをちよつと反省するといふ、そういうような役割を果たしているのが、うちの村の夏祭りであり、川下げでもあります。

ですから、例えばこういうことを通しながら、絶えず、私たちの社会は自然とともにある、自然に支えられているということを確認しなければいけなかったし、それからまた、お盆の行事なんかもその典型ですけれども、絶えず近くにご先祖様というか、先輩たちがいて、そういう人たちの関わりの中で私たちは生きていくということを見ることによって、今の人間の論理だけで突っ走ってはいけません、やはり歴史を紡いできた過去の人たちの思いを継承しながら、もちろん変えることは変えてもいいんですけれども、過去の人たちの思いを打ち捨てて何かをやってはいけない、そういう思いを知りながら、受け継ぐものは受け継ぎ、また変えるものは変えていくと、そういうふうでなければいけないんだっていうのが一連の行事の中にあるという。ですから、村の年中行事ってのは、決して一つのイベントではないわけで、むしろ私は伝統的な自治というものの中に組み込まれたものというふうに思ったほうがいいという気がいたしております。

ですから、一年間にはたくさんの中行事があつて、そしてそういうものに村の人たちは、どこの寺の壇家の人であつても参加している。うちの村ですと、宗門としては比較的曹洞宗が多くて、あと天台宗のお寺が若干あつてという、そんなところで、山の中ですからすべての宗派がそろつてるわけじゃありませんけども、そういう雰囲気のある村ですけども、実際には何宗であるかということ、あまり村人は関係ないわけで、村の人間たちとしては、むしろ村の信仰といえますか、それを大事にしている。

ですから、私も村に行くようになって、びっくりした経験も何べんもあつて、例えばあるかたが亡くなったと、それで私も葬式に行つた。そうしましたら、司会をなさつたかたが、「何々家は神道でございますので、お葬式は神道の形式で執り行います」という説明があつて、私、村の生まれじゃありませんから、どこのうちがどうかまでは知らないわけです。「あ、そうか、ここのうちは神道だったのか」と、こう思いましたのに、当然のようにお坊さんが入つてきて、天台宗系のお坊さんでしたけど、当然のようにお経を読み始めた。僕のほうは、「いや、今、神道と言っ

たはずなのに」と思って、周りを見たんですけど、だれも不思議そうな顔もしていませんか。そうこうするうちにお焼香の時間がまひりまして、そうしましたら、櫛を上げて、そして音を出さないようにかしわ手を打つていうんです。神道形式なはずですよ。それなのにその期間中、ずっと横でお坊さんがお経を読み続けているという、お経を聞きながら、かしわ手を打っているという、実に僕としては不思議なお葬式だったんですけど、村の人たちからすると、誰一人として不思議な雰囲気もなくて。つまり、何々宗であるかということよりも、自分たちの自治する世界の中に信仰があつて、それは時に山の神信仰だったり水の神信仰だったりもするけれども、そういうものとも含めて、そこにお寺があつて、あるいは神社があつて、それでそこに村があるという、それが私のいる上野村という村でもあります。

ですから、特に戦後になりました、政治と宗教は分けたんですけども、もちろん、それは、うっかりすると戦前のように国家神道と政治とが……。もちろん、国家神道ってのは、決まり上は宗教ではないってことになってましたけれども、しかし現実には国家神道と政治が一体化してしまうという。それが侵略の時代をつくっていったわけですから、それを繰り返すわけにはいかないということも確かなんですけども、村々の単位になってくると、人々の手を合わせる気持ちとか祈りの気持ちとか、そういうものとともに村の暮らしがあつて、そこに村の自治があつて、そういう世界があつて、あんまり機械的に政治と宗教を分けちゃうと、かえってややこしいことになるという、そういう一面も持っていたりいたします。

少し話が脱線しましたが、今申し上げたように、ヨーロッパの社会観は生きてる人間たちによってのみつくられているのがこの社会であると考へた。それに対して日本の社会は、自然と生者と死者によって構成されているのがこの社会だと考へた。結局、今回も東日本大震災が起きてきますと、私自身も、実は今回の震災の翌日にちよつとヨーロッパに行つておりまして、原発の爆発は向こうのニュースで聞いたという感じでした。地震当日は、いたんですけど

も、あのようになってきましたので、ちょっと行くのやめようかなという気持ちもあつただけで、かなり向こうのほうでいろんな約束をしちゃっていて、キャンセルも難しいので、しかたがないから翌日、ちょっと無理をして成田から出発いたしましたして、向こうに着いたら原発爆発というニュースを聞いて、ちょっとびびくりしたという感じでもありました。

ただ、実際には着いた日の、だから翌日のつてことですけど、例えばフランスの新聞はほとんど日本の新聞と変わりませんで、その日は大体ページの八十パーセントぐらいが、日本の津波のニュースで、またテレビをつけましても繰り返し繰り返し日本の津波の映像を流してるわけです。向こうのかたも大変びびくりしてる。また、日本の地形をよく知ってる人ばかりじゃありませんので、ですから日本中が津波にのまれたつていうような気持ちになつたかたもたくさんいらしたようです。ですから向こうでも、タクシーになんかに乗っても、よく運転手さんから、「日本は崩壊しちゃったんだつてね」とかいう言葉をかけられるつていいですか、よくありましたけれども、それぐらい向こうでも大きなニュースです。翌日になりますと、原発爆発というのが、それがまた大きなニュースとして入つてきて、そしてそれから一週間ぐらいいは、もうほとんどこのニュースで、常に半分以上の新聞の紙面が埋まつてるといふ、そういう状況でもありました。

ですから、その震災の直後はちょっといなかつたんですけども、帰つてまいりまして、やはりそのときに、私自身、一番勇気づけられたのは、知り合いの三陸の漁師さんたちからのメッセージで、その三陸の漁師さんたちも被災されていて、決して無傷ではなかつたんですけども、ただ、それにもかかわらず、むしろ彼らのメッセージは、「海は無事である」「海は無事である」だから、また漁師としての生活は再出発できるから心配しない方がいい」といふ、そういうメッセージを頂いた。実際にはそんな樂觀できる状況ではなかつたわけで、ご家族を亡くされたかたもいたし、それから船はことごとく流されていたし、人によっては家も失つていたしという、決してそんな、「大丈夫だ」

と言えるような状況ではなかったんですけども、むしろ私たちが力をあげるといふ感じではなくて、向こうのほうから、「海は無事だから大丈夫だ」といふ、そういうメッセージをもらって、逆に私たちも、何となく何かやれそうな気もしたし、何とかいけそうな気もした。だからむしろ向こうから応援してもらったという感じでもありました。

やはりそういうのを見てみると、日本の伝統的な社会観が、どこかで生きてるなっていう感じがしてくるわけで、海が無事である以上、この社会の少なくとも半分は無事なわけです、それに、漁師さんたちからすると、津波というのは、いわば自然の波動のようなものにすぎないと。だから、津波というものは確かに人間たちには激しい被害を与えるんだけども、別に自然に被害が与えられたわけではない。

漁師さんの話だと、三陸地域では言い伝えがあるらしくて、海の底というのは、少しずつ堆積物がたまっていく。三陸の海は大変きれいですから、たいした堆積物はないと思うんですけども、それでも死んだプランクトンとか、あるいは寿命尽きた海藻とか、いろんなものが、少しは堆積していく。だから時々それを掃除したほうが海の力はよみがえるそうで、しかし、海底の底を掃除するのは人間にはできない。それから台風などがきて激しい波が立っていても、海底の底は静かなんだそうです。あれは表面が動いてるだけで。そうすると、どうやっても底の掃除ってのはできないわけで、それをやるのが津波であると。だから、あの地域は、百年にいったんぐらい大きな津波が来ていましたけれども、人間にとつてはそんな簡単な話じゃありませんけども、自然にとつてはむしろ自然がよみがえっていくという、そういう一面も津波にはあるということのようです。ですので、そういうことも含めて、「三陸にはこういう言い伝えがあるから大丈夫だ」といふようなことを、その漁師さんのほうから伺ったりもして、私たちも大変勇気づけられた。

実際、三陸の海に関していえば、そのとおりだったらしくて、今年の海の状態は、一昨年よりも良いという、そういう感じのようです。だからこういうことをただちに言えるってのも、結局、私たちの社会は壊れきっていないと。

つまり自然が無事である以上、この社会はまだ壊れていないという、そういう一種の確信のようなものがあって、もちろん、自分個人を振り返ったり漁船や他の人々を振り返れば、いろんなものが破壊されていて、そんな楽なことを言っていることはできなかったんだけど、でも、それでもという、やっぱりそういう確信が出てくる。やはりここにあるというのは、この社会は自然と人間によって構成されてきたわけで、そういう思いだったような気がいたします。

去年はヨーロッパから三月二十日過ぎぐらいに帰ってきたんですけども、私も含めて、何となく気持ちがすっきりしないといえますか、もちろんこれだけの大災害ですし、それからまた今回は、津波の全ぼうを繰り返し繰り返し映像で見るということにもなりましたから、そんなに気持ちがつきりするはずないんですが、一体何が、こういう気持ちにさせているのかなというふうに思ったところ、やはり、まず復興とかいう言葉を語る前に、みんなして亡くなった人たちを供養する、これをやらないとわれわれの気持ちはすっきりしないというふうな気がして、それでどういうふうにしていいのか、よく分からないので、インターネット上に一方的に私のメッセージを載つけて、それで適当に日にちを指定しちゃいまして、大体三月十一日から、四十九日目ぐらいの日だったのですが、その日は日曜日で、かつてに設定して、この日の十二時でもいいし、それから津波が起きた十四時過ぎでもいいですけども、そのときに自分の方法で亡くなったかたがを供養しよう。そのやり方もいろいろあつてよくて、宗教を持つてらっしゃるかたはその方式でやればいいし、それから別に特段宗教があるというわけでもない人たちの場合には、ちょっと北のほうを向いて手を合わせるとか、どんなことでもいいから、みんなして供養しようという、そういう呼びかけをしたことがあります。それは、インターネット上ではずいぶん広がってくれて、日本中ずいぶん多くの人たちがそのときに手を合わせるといふようなことをしてくださったみたいです。

やはりこういうのもそうなんですけども、亡くなった人たちを供養するというのは、別に亡くなった人たちの魂が

あるとかないとか、そういう問題ではなくて、亡くなったかたと生きてる私たちとの間の、その結ばれ方、結び方なのです。そのところに、やはり、ある種のけじめがついてこないと次に歩めないっていいですか。だから、供養するというのは、亡くなった人たちの思いとか歩んできた歴史とか、そういうものを無駄にすることなく私たちはこれから生きていくということを、そのことを宣言することで、それが死者に対する約束という言い方をしてもいいのですが、そうすることによって、亡くなった人と自分とがどういう関係でこれから生きていったらいいのかということ、どこかで、気持ちの中で確認することだと思っております。

結局、こういう一つの作業を経ないと、何となく「復興」という言葉が空回りしてしまって、何か実感のないものになっていくっていいですか、単なる予算の問題になってたりするということですか。やはりそうではなくて、本当に私たちは今回のことをきちっと受け継いでこれから歩むんだってことになる、そこに亡くなった人たちを供養して、亡くなった人たちとある種の約束をしていくというような、そういうことが必要になってくるという気がいたします。そういうことをふと思ってしまうのも、やっぱり一面では日本の伝統的な社会観に戻ってきてるので、つまりこの社会ってのは、絶えず死者との関係を考えながらつくっていく社会だったわけで、そのところに、また戻ってきたという気がいたします。ですので、今、言ったような意味で言うと、今回の震災以降どことなく日本の社会が長い間持ってきたようなものが、何となくよみがえってくるという、そういう雰囲気や片方ではつくっているという気がいたします。

ただ、そのときに、やはりどこに戻るのかってことになるわけですけども、「伝統」って言葉はかなり危ない言葉でなぜかっていますと、何をもって伝統と言うのかと、いつごろ成立したものを伝統と言うのかというのは、非常に難しい問題だからです。実際、例えば食べ物なんかでもそうですけども、「日本の伝統的な料理」という言い方をすると、どんな料理があったとしても、私たち、しょうゆってというのは欠かせないもんだと思ってる。簡単にい

えば、煮物にも入れるし、焼き物にもかけるし、漬け物にもかけるしみたいなのが、しょうゆです。ところが、しょうゆっていう調味料が一般の人たちの中に出回っていくのは、江戸の町人の場合でも、江戸の中期から後期ぐらいなんです。江戸の中期ぐらいに和歌山県の醸造の関係の人が、銚子のほうにやってきて、あのへんにしょうゆ屋を開いたわけです。それが利根川から江戸川と船で運ばれて、それで江戸の町に運ばれてと。

もちろん、しょうゆ自体は、平安時代とかもずっと古い時代から、たまりじょうゆってのがあったんですけど、これは一般の人たちが食べる料理、調味料ではなくて、非常に高級なものだったというふうに思ってもらえればいい。ですから江戸の中期ぐらいになって、江戸の町人でも、ようやくしょうゆを使うようになったと思ってもらえればいいわけで、ですから、当時の人口からいえば農山村の人が圧倒的に多いですから、その農山村社会にしょうゆっていうものが日常的に入ってくるってことになる、おそらくもっと遅れるだろうという気がいたします。そうすると、しょうゆがない日本料理って何だろうってことになってくるわけですけども、基本的な味付けはみそだったというふうに思えばいいということなんです。

ですので、そんなふうに「伝統」っていう言葉はいつ頃からのものを言うのかというの、非常に難しい。もちろん江戸の中期ぐらいから使われてきてるんだったら、もう伝統って言ってもいいかもしれませんが、もっと長い歴史、大きな歴史で見えていくと、たかだか江戸の中期かなという言い方もできちゃうわけです。絶えず伝統にはこういう問題がございます。

私の家にも、上野村のほうは古い農家を譲っていただいたんですけど、そうしましたらば、元の所有者のかたが、信仰が変わってしまって、もう東京のほうに出たかたなんですけど、それで仏壇が要らなくなっていた。ただ、さすがに仏壇を壊して燃してしまうのは気が引けたらしくて、家には仏壇は置いてあったんですけども、彼の信仰にとっては仏壇は要らない、そういうことがあったらしくて、家を譲っていただいたときに、「悪いけどこの仏壇置いて

いくからな」っていう話になりました、私のほうも、「どうぞ」ということで。ですから初めから仏壇つきの家を分けていただくという、不思議なことになりました。

実に不思議な仏壇で、一間幅ぐらいのけやきを使った仏壇なんですけども、その真ん中に、なぜか西本願寺系の「阿弥陀如来」がご本尊として置かれていて、脇仏に東本願寺系の「阿弥陀如来」がまた置かれているという、普通、ちよつとこんなん、ないじゃないかと、どうしてこういう組み合わせになったんだということなんですけども、どうも村の人に聞いてみると、そのうちの先祖が昔、金貸しをやっていたらしくて、そのときに借金のかたに取ってきたのではないかとというふうに僕は思ってるんですけども。真偽のほどはよく分かりません。そんなような仏壇があつて、東京のほうにも、小ぢやかな仏壇がございます。

仏壇というものが広がったのはいつ頃からだったかということになりますと、これもまた難しいわけで、やっぱり江戸の中期ぐらいなんです。ですから、江戸の中期から広がってるんだから、日本の伝統の形式っていうのも構わないし、長い歴史で見えていくと、先ほど言ったように、たかだか江戸の中期か、「まだ最近のもんですよ」という言い方もできたりして。つまり伝統ってのは、その点では本当に、言葉は簡単だけど、意外と難しいということがあつたりいたします。

そういうことなんで、今、「伝統回帰」と、「最近の若い人、ちよつと伝統に戻ろうとしている」というふうな言い方をしたんですけど、じゃあ、どういう伝統に戻ろうとしているのか言うと、どうやら、今の若い人たちですから、あまり親からも聞いていないし、いろんなことも知らない。私がつきあつてる大学院の学生さんたちでも、「おたく、何宗？」って聞いても、「知りません」と言ってるのがほとんどです。ですから、そのぐらいだというふうに言ってもいい。だけれども何となく気持ちの中で、昔から紡いできたものを、大事にしたいという気持ちが芽生えていて、そこで感じてる伝統ってのは、おそらく非常に古いもの、つまり自然と人間が一緒になって暮らしていたような、そ

ういう時代に培われたものでもあります。あるいは人々が村々で暮らしていたときに培われたものでもあります。そういうような、どこか非常に古くから続いてきたと思えるようなもの、そういうものに、今、何となく気持ちが傾いてる、魅力を感じてるって言ってもいいかもしれませんけども、それが今日のような気がしています。

そういう時代ですから、今の若い人たちにとって、特に原発事故は許しがたいわけで、つまり、原発事故は、人間だけではなくて自然をも被災させた。人間自身は、もちろんここにいらっしやるかたも私も含めて、決して原発を積極的に推進したわけでも何でもないけれども、でもある意味では、われわれがみんなしてつくってきた社会が、いわば原発をたくさんつくらせるような社会であった。だから、決して私たち自身が「やろう」と言ったわけじゃないかもしれないけれども、やっぱりこういう社会をわれわれはつくってしまつて、その結果としてたくさんさんの原発ができて、その結果としてそれが事故を起こしていくという、そういうことでもありますから、その点では、私自身そうなんですけども、やっぱりこの世界に生きてる人間としての、ちょっと厳しくいえば、共犯者としての自分といえますか、そういうものもどこかで感じている。

だから個人的には私は、こういう問題、少し考えるようになった頃から一貫して原発には反対はしてきたんだけど、でも反対したとしても、やっぱりこういう社会のメンバーとして生き続けてきた、そういう点では、決して共犯者の一人という責任から逃れることはできないだろうという気がしています。だから、その点では、全員がどこかで共犯者の一人みたいな一面を持ちながらこの事態を見つめなければいけないというふうに思っている。

しかし、その点で言うと、自然というのは全く共犯者じゃないわけで、今度の事故によって一方的に被災をしまつた。こういうことって許していいんだろうかという、そういう気運っていいですか、それがあつて、それもまただから、この社会をつくっている少なくとも半分のメンバーである自然、そういうものと、これから自分たちがどういう形で共に生きていくのかというときに、この原発問題が、軽々しく終わらせることのできない問題として、登場

してきてる。

だから、僕の周りのつきあつてる若い人たちなんかでもそうですけども、当初は、どの程度の放射性物質が出て、それがどの程度の健康被害を与えていくのかとかいうことがよく分からなかったので、どうやって危険を回避するかということがあつたわけですけども、それからある程度時間がたつてくると、高濃度に汚染されているような地域は別として、意外と野菜とか米などへの移行係数が少ないとか、いろんなことが分かつてきた。そうすると、もちろんだから大丈夫だという気はないんだけれども、しかし、この問題を、単に危険か危険じゃないかっていう問題で終わらせてはいけないんじゃないかという、むしろそういう気分になってきた。

つまり人間たちは自然に対して、どこまで、何をしてよくて、何をしたらいけないのかと、そういうことを問わなければいけない。そうするとやはり、自然を一方的な被害者にしてしまうようなことをしていて、われわれの社会はもつんだらうかという気持ちにもなってくる。ここの根底にあるのもやはり、この社会は自然と人間の社会である。だからそのことをわきまえて人間たちは生きていかなければいけないという、そういう思いだろうという気がいたします。

明治以降になつてまいりますと、日本の社会も近代化の歴史をたどり、そしてまた、それに伴つて、この社会に合理的な考え方を定着させながら、合理的にこの社会を運営していくという、あるいはものの考え方でも合理的のものも考えていくという、そういうしきのが広がつていったし定着していったと言つてもいいんだらうという気がいたします。しかし、私の専攻する哲学の世界で言うと、合理的な思考というのは、ヨーロッパの哲学者も含めて、かなりけちよんけちよんになつていますか、それが今日の現実であります。どうしてかかって言うと、合理的なのは、ある約束事の中で、合理的にできるようになつてから合理的にできるわけです。

つまり、簡単に言えば、例えば、買い物にいく。それで、九千八百円のものを買つて、一万円札を出して、おつり

を二百円もらう。これはきわめて合理的なやり方なわけですけど、そのときには、まず数という、数字というものがこういう法則で決まってるという約束事があって、しかもそのお金というものが、国が保証してる信用でできる価値であるという、そういう前提に立っていて、そういう幾つかの前提に立つからこそ、そこで今言ったような、九千八百円のものを買っておつりをもらうというようなことでも、合理的にできている。

しかし、もしもここで使ってお金というものが、保証が怪しい、つまり信用に足るお金じゃなかったらこのやりとりは成立しないわけで、それから、もし数というものが共通の約束事の上に成り立っていないければこの取引は成立しない。ですから、ある約束事に従ってやっていくから、そこでは合理的なものが成立するというふうに考えてもよいということですよ。

ですから、科学というのもそういうもんであって、科学っていうのは、決して根本的な真理を明らかにする学問ではない。そうではなくて、科学という方法で物事を分析していったときに見えてくる真理を追究するのが、科学です。だから科学という方法以外で追究すれば、科学からは見えない真理が見えてくるというのは当たり前のことであって決して科学だけが真理を追究するわけではない。あくまで科学も、一つの見方にすぎない。

だから、例えば私はよく思うんですけども、ガリレオなどが登場してきて、世界は天動説から地動説に移行した。確かにこれは、宇宙空間に人工衛星を打ち上げても、何をして調べてみても、確かにこの世界は、地動説なわけ、太陽系の周りを地球が回り、しかも一日に一回自転してるといって、この形っていうのは、否定しようがない。しかし、これもまた、宇宙というものを一つの構造物として見ていく、そういう見方をしたとき、地動説的世界は真理として登場してくるわけで、日々私たちが、生きている、呼吸をしたり歩いたりしている世界、そこにある宇宙というのは、あくまで天動説なんです。

つまり、私たちが日々歩いているのは、太陽が東から上がってくる世界であり、あるいは夕方、西に太陽が沈む世

界で、あるいはお星さまが少しずつ西に向かつて動いていく世界。その中で生きてるわけで、だから自分たちが呼吸をしている世界で、宇宙を下からふかんしていった場合、その場合に見えてくる宇宙は、決して天動説が間違っているわけではない。ただ、宇宙というものを一つの構造体としてとらえようとしたときには、天動説はいかにしようがないわけです。ここにはやはり、太陽を中心とする世界があったり、あるいは銀河系宇宙を軸にする世界があったりしてという、そういうことにすぎないわけです。だから、地動説を認めたことによって、別に天動説を否定する必要もないわけです。

例えばお百姓さんが畑を耕しながら見上げて空というのは、明らかに天動説の空であって、別にそのときにお百姓さんが、今、地球は反対にひっくり返ってるかもしれないなんて考える必要は、全くないわけですね。また、天動説の宇宙が見えているからこそ、そこで人間たちはいろんな感情とか感覚を磨くこともあったし、そこからいろんな文学も生まれたし、そういうふうなものの世界の中でわれわれは生きていくという、そういう一面だっている。だからここには、いろんな真理があつていいわけで、それを科学的な真理のみが唯一の真理とするのは、とんでもない誤りだといふふうにいわなければいけない。

二十世紀に入った頃に、フランスの哲学者でベルクソンという人がいたんですけども、彼は自然科学に対して、「これまでの自然科学は」という前提つきではありましたが、「これまでの自然科学は暴力にすぎない」というふうに言っていた。それはどういうことかと言うと、「自然科学は自然科学の方法で見つけたわずかな真理を発見したにすぎない」。だから、まだ自然の全貌も明らかになつてないし、さらに言うと、それは自然科学の方法で見つけた真理であつて、自然科学以外の方法で見れば、違う真理が見えてきて当然である。にもかかわらず自然科学というものは、これが唯一の真理であるといふふうな主張をし、そしてそういう形で、いわば人々を洗脳してきた。「これは一つの暴力にすぎない」という言い方をしたのが、二十世紀初めの頃に活躍していたベルクソンという哲学者でも

ありました。実際、本当にそういうことだということですよ。

そうすると私たちは、合理的にやってあげばいいようなものは、合理的にやってあげばいい。しかしその奥には、合理的にはとらえきることのできない、何かがありうる。そこには人の思いとともに展開する世界も存在する。例えばうちの村ですと、何宗のかたかは超越して、全員が山の神を大事にしていたり水の神を大事にしたりして暮らしている。しかし実際には、じゃあ山の神に会った人はいるか、水の神に会った人は、と聞けば誰もいないわけです。そこで村の人たちに、「本当に山の神いるんですか」とって質問をしてみれば、みんな困っちゃうわけですね。「ま、いいじゃないか」ぐらいの返事になってしまう。

つまり、山の神が存在するとか水の神が存在するっていうのは、合理ではとらえられないわけです。だから決していることを証明することもできないし、そういうもんなんです。実際、本当にいるのかどうかさえない。ただ村人の感覚としては、そういうものを大事にしながら生きてきた歴史、それを守ってつたほうがこの村は守れるんだという、そういう気持ちがあるわけで、ですから、どこかで山の神や水の神を大事にしながら生きている。つまり、それでいいじゃないかっていうそういうことを失ったときのほうがいけないんだという、むしろそういう気持ちで。

こういうものもなかなか説明をしにくいわけで、つまり全く合理性を持ってない。だけど、そこに住んでいると、それでいいんだというふうに感じる。特に私など、東京の生まれですから、上野村に行つて初めて山の神を知ったというぐらいのものであった。ところが数年いると、僕も山に入るときには、山の神に挨拶をして入るとか、出てきたときには、「おかげさまで無事に出てきました」と、また挨拶をして出てくるとか。それから、私もだんだん、山の木を切ったりとかすることもあるようになってきたんですが、山の木を切るときには必ず山の神に、「切らしてください」というお願いをして、それは切るけれども、切った木は無駄に使いませんからという、そういうことで切ることに、許しを願つて、それから切ったり。そういうことをしたほうがいいような気持ちになってくる。

だから私も山の神に会ったこともないんだけど、何かそういうことを大事にしながら人間が生きていくほうが、やっぱりいいような気がしてくる。それは結局、合理的に説明ができないんだけど、村にいと、理解して山の神を信仰するのではなくて、そういう生き方をするのが納得できる、あるいはそういう生き方することは了解できるっていう、そういう形で、いわば、村の信仰みたいなものに何となくなってしまうという、そんな感じでもありました。

ですから、そういう意味でも合理主義ってのは万能ではないんですけど、実は合理主義ってのは、どのぐらいの間幅でものを考えるかによっても、話が変わってきてしまうんです。例えば、今、日本が不況であるとか、デフレであるとか、よく言われる。そうすると、不況脱出とかデフレ脱出で、例えばこういう政策が必要だとかいう話が出てきたりする。それは日本のGDPを引き上げるっていう点では、なかなか今、GDP引き上げることも有効な政策なんてなくなってきたてはいるんですけども、それでも、その政策をする人間のほうからすると、例えば公共事業を増やしてGDPをちよつと上げるようにするとか、等々のことが主張されていく。

それはまた、現状ではある種の合理的な発想という言い方もできるわけですけど、じゃあ、それを続けていったときの、もつと長いスパンでものを考えたとき、例えば五十年とか百年とか、そういうスパンでものを考えていったときに、そういうやり方がはたして合理的な未来をつくるかどうかと言うと、非常に非合理的なものをつくってしまうということはよくあるわけです。例えば、そのことによっていろんなものが壊れていく。それは自然も壊れていくし、それから地域社会も壊れていくし、それと、そういう地域社会とともにあったようなこれまでの信仰とか、そういうものも壊れていくとか。そういうことが進んでいったときに、はたしてわれわれの社会は合理的な未来を迎えてるだろうかということになりますと、分らないのです。

結局こういうことが強く感じられたのは、今度の原発事故でもあったわけで、つまり、今でも主張してる人がいま

すけども、原発のほうが、例えばコストが安い。ところが、これはもう誰でも今、知ってるように、それは現状のランニングコストのことだけ言ってるわけで、原発を運転すればするほど廃棄物が出てくる。その廃棄物は、再処理するのかどうするかかわらず、多大なコストを必要としている。それは今では誰でも知ってるといってもいいわけですけども、今でも例えば経済界なんかは、原発を止めて、即電力料金が上がって日本の経済は大ダメージを受ける、そういう言い方をするわけです。

だから、現状のランニングコストだけ見れば、それは言えるわけですけども、そのあとの処理費から、それから今度のように事故を起こしてしまった場合には、当然ながら最終的には、福島のも、あの爆発した原子炉ってのを取り壊して、何とかせざるをえない、そうじゃなければチェルノブイリのように、最終的にはコンクリ詰めにしちゃうかです。何かせざるをえないわけですけど、コンクリ詰めにしても、チェルノブイリでも、もうコンクリが劣化し始めた。つまり、中で熱が出続けてるわけですから、普通のコンクリよりコンクリがもたないわけです。そうすると、二十一年に一ぺんぐらい、また厚くふたをし直すというか、それをやっていかなきゃいけないわけで、そのために一体何年間続けるのかということになってくると、はっきりはよく分かりませんが、ということになってくる。

ですから、フィンランドは、放射性廃棄物の管理年数を十万年っていうふうを設定してますけども、そういう時間までかかるような廃棄物を出し続ける。そうすると、結局、それが決して安いコストであるはずはない。それからまた、ちょっと今回のように事故が起きてしまうと、被災者のかたを無視したとしても、撤去したり処理したりする費用ってのがいくらまでかかるのか、よく分からない。これから先の、例えば除染費用だとか、そういうことまで計算に入れていくと、誰にも計算ができない。

結局そうなってくると、現状における経済的合理性ってのはあるわけですけども、それが長時間で見えていくと全く合理的ではないという、そういう仕組みになっているところに気がつくんです。ですから、合理的な物事の決め方

ていうのは、実は、時間幅をどう取るかによって変わってしまうということでもあるわけです。

この問題は、資本主義形成期からあって、イギリスで産業革命が起きた頃に、一つの論争があった。資本主義は、経済が永遠に発展し続ける、だから、多少波はあったとしても、ずっと右肩上がりでも上がり続ける、そのことを前提とした仕組みなんです。だけど、もし右肩上がりが続くと続くとするならば、資源も含めて自然のほうも無限にないと、やっていけないという問題が出てくる。この理論をどうつじつま合わせをするかという議論が当時、若干論争としてあった。結局、経済学者たちはどういうふうに言ったかと言うと、自然は無限に存在するものと仮定するという、実にすごい仮定をやった。

つまり、その仮定を置くことによって経済合理主義を確立したわけです。ところが、この仮定は誰が考えても無理があるわけで、地球がだんだん膨れ上がってもいかなない限り、自然が無限にあるわけがない。そうすると、じゃあ、この無理をどう考えるか。結局、それは将来の科学に丸投げされたわけで、将来の科学がすべて解決するだろうという、そういうことで解決させてしまった。だから原発なんかも本当にその象徴で、廃棄物が出ること分かっていた。しかも、それがずっとたまり続けていて、青森県の六ヶ所村に、今、貯蔵プールがあるわけですけど、福島四号炉の燃料棒でさえ持つていけなくなっちゃってるのが、もう貯蔵プール自身が九十七パーセントぐらい埋まっちゃってますから、全部、使用済み核燃料棒で。ですから、新しい貯蔵施設造らないと持つていき場がないという、そういうことにもなってる。

しかし、にもかかわらず、なぜこれが推進できたのかと言うと、将来の科学がこういう問題は解決するだろうという、いわば科学への丸投げだったわけです。つまり、ここにあるのは、実は非合理的なわけです。もし、合理的に将来の科学ができるだろうということならば、ちゃんと目安が立っていて、こういう科学あるいは技術があるからこの問題は解決できるということならば、ある種の合理的な決定ですけれども、そうではなくて、よく分からないものは

全部、将来の科学に丸投げするという。それは、だから、最初に言った、自然は無限に存在するものと仮定するという非合理性、それと全く同じなわけで、それを今度は、将来の科学が何でも打出の小槌のように解決してくれるだろうという、そこに投げてしまった。だから、実は原発の合理性といのは、その外側に多大な非合理性があつて、その非合理性をそのまま承認することで、実は合理性が成り立つ、そういう仕組みになっていたというふうに言つてもいいわけです。

それは、今の私たちの社会も全くそうで、例えば、お金を発行してる日本銀行は民間金融機関である。あれは決して国立銀行ではないわけで、あれは、だから税金をちゃんと払ってる民間の金融機関なわけです。その民間の金融機関が、一方的に刷ってるものを私たちが信用できるものとしてとらえる。昔のお金は信用できたわけです。なぜかと言うと、いざとなつたら、金と換えますよという約束になってましたから。そうである以上は、金価格を割り込むことはないという信用はあつた。しかし今のお金は、世界中どこの国に行つても、金と交換するなんて約束してはお金ありませんから。それは一方的に印刷をすればらまいてるというふうに言つてもいい。だから、その印刷して民間金融機関が作ってるお金が本当に信用に足りうるのかどうかということになってくると、実は怪しいわけです。実際、インフレが起きたりして、今までの千円が百円になってしまうということが起こりうる、あるいは戦後の初期の日本は、それが激しい形で現れたように、戦前のお金がただ同然になってしまうということが起きたわけです。だけれども、そういうふうな非合理的部分には、そのままいいことにしておいて、それで、現実のお金にはそれ相應の価値があるという、だから千円には千円の価値があるし、一万円には一万円の価値があるという、それを認めることによって、お金のやりとりの合理性は発生してくるという。だからその奥にあるのは、実は、きわめて非合理的なものなわけです。

そういうことが、われわれの社会を、つまり原発だけではなくて、いろんな形で、いわば支配していたって言つて

もいい、だから、考えてみるとすべてそうなわけで、例えば学校に行つて、高校に行つて、大学に行つて、最近は理科系なんかでいきますと大学院の修士課程に行くというのが当たり前つていう感じになってきましたから、学校に行く。だけど、もちろん私は、「学校に行くな」と言つてるわけじゃないんですけれども、学校に行つたらば、何かが約束されているなんていう合理性は全くないわけです。かりに、ある有名な大学に行つて、それに行つたからこそ、いいところに就職できたとして、そのことがその人を幸せにしていくなんて保証は、全くない。

ですから、ここにも、背後には非合理的なものがあるんだけど、しかしやっぱりそこだけを見ると、やっぱり、できるだけ良い高校に行つて、できるだけ良い大学に行つていかないと、将来の設計がうまくいかないような、そこに何かある種の合理性があるような、そういう形になっている。だから、ここにある合理性も、その奥にある大量の非合理性みたいなものを目をつぶることによつて成り立つ合理性つていいですか。だから、私たちのそういうふうな、日常行つてるような、いわばささいなことつて言つてもいいですけど、そういう式のものから、その原発の問題までは、つながつて見えるようになってきた。それが今回だったという気がいたします。

これから復興の道を、私たちはどうしても歩まなければいけないんだけど、やはりそこでもいろんな新しい試みがあつて、私たちがこれからつくつていく社会を、単なる元に戻すことではなくて、この社会は自然と生者と死者とが協力しあつてつくつているんだと感じられるような社会、そういうものをつくつていかないといけないのではないかという気持ちもわいてくるし、それから復興というものを、単に建物を造つたり道路を造つたりすることではなくて、人間たちがここで生きるつてのは何なのかということをつかみとれるような形で復興が進んでいかないと、決してよくないということも分かつてきた。

ですから私自身、「復興のグラランド・デザイン」つて言葉が使われ始めたときに、そのときに国などが考えた復興のグラランド・デザインは、いわば土木によつて造つていくグラランド・デザインつていいですか、だからどこかに場

所を確保して道や家を造っていくという、そういうグラランド・デザインだったんですけども、私自身は、それではないだろう。そうではなくて、復興のグラランド・デザインは、むしろ文学的なものだろうという気がした。文学的っていうのは、別に厳密な意味で文学じゃなくていいわけで、つまり、人々が亡くなるときに、ここで生きてよかったなあとと思うとか、それから人によっては、海を感じられる町とか、あるいは子どもたちの遊んでる姿が見える町とか、あるいは笑い声が聞こえる町とか、どういうことでもいい。そういうようなものこそグラランド・デザインであって、だから地域ごととそういうグラランド・デザインをつくっていかなくやいけないと思った。

例えば、もしもうちの上野村が大災害に遭って大変なことになった。だから村自体をすべて再建しなくやいけないというようなことを、生き残った人たちがやるということが起こったら、まずはじめにしなければいけないのは、どんな村で暮らしたいのかの検討でしょう。それは、うちの村だったら、自然とともに生きることを実感できる村。それから、死者たちというか亡くなった先輩たちも、まだここに一緒に結ばれているという、そのことを感じられる村、あるいは山の神や水の神とともに生きる村であるかもしれない。うちの村にはへび神様とか、まだいっぱい神様いますので、そういうふうな神々とともに生きる村かもしれない。ひよっとしたら、神も仏もすべてを超越したような、そういう生き方をする村かもしれないし。つまり、そういうようなことで、「よし、こういう村をもう一度つくろう」と。じゃ、そういう村をつくるためには、具体的にはどういうデザインをしていったらいいかを考える。そこから、復興は始まってくるんだろうという気がします。ですから、その前のプロセスを経ないでいきなり復興レイアウトを引いても、復興にはならないなという気がしている。

実際、今回はそういう気持ちに建築家たちがずいぶんなっていて震災以降、私も少しつきあっているような、今の日本の建築界をリードしているような人たちが、そういう人たちが、被災地に行って被災者と一緒に考えようという、いろんな行動をしています。そういう人たちが考えてることも、自分たちは建築家ですから、最終的には設計をして何か

を造つていくんだけれども、それが目的ではない。そこで人々がそういういろんな思いを持ちながらコミュニティを再建していくか。そのときに建物は何かができるのかってことを考えている。だからそこにあるのも、機軸にあるのは人々の思いという、非常に文学的なもので、それに応えようとするときに、じゃあ、具体的にはどういう建物が要るのかという、それをまた、地域の人と一緒に考えていく。

だから、今、日本の建築家がよく言うんですけども、「建物というものを、建築家たちの作品にしてはいけない」最近までの建築は、建築家の作品だったんですね。ですから、人々が競って自分の作品をつくらうとした。だけど、それは違うんだ。それは全く逆であって、結局そこにどういうコミュニティがあり、あるいはどういう文化があり、どういう風土があり、その中で人々がどういう生き方をしようとしているのか、それが建築の基本であって、そういうものが何であるから、じゃ、こういう建物を造つたらどうだろうという提案があるわけで、決して建築家の作品にしてはいかんのだという、そういうふうな思いを、実は最近、日本の建築家の、今の建築界のトップを走ってるような人々が、だんだん合意してきてるっていう感じですよ。

ですから、去年の今頃、国際建築家協会の世界大会があつて、東京でたまたまあつたんですけども、ちょっと私も呼び出しを受けて、短いスピーチをした。国際シンポジウムですから、参加者の半分ぐらいは各国のかたですけどね、だから同時通訳がついてという、そういう形なんですけれども、報告していた日本の建築家たちから出たのは、本当に、建築家は作品という言葉放棄すべきであるとか、それから、風土やコミュニティとともに建物があるとするならば、その使われ方は変貌していく。ということになってくると、その変貌とともに、使われ方が変わる建物。だからどこかの時点においても完成しない建物。そういうものを目指さなければいけないとか、そういうようなことが次々に報告をされて、そこにいた外国からの参加者のかたは、欧米系のかたも、あるいは中国とか韓国とかからもずいぶんいらしてたんですけども、皆さん、ちょっとあっけに取られてたっていう感じで、日本側の問題提起が、実は全く

通じなかった、それで日本の建築家は今、何を考えてるんだ、さっぱり分からんという、むしろそういう感じになっていた。

ですから今、いろんな意味でそういうとこに来てるんだらうという気がいたします。その人たちが言う、「建築家の作品ではない」という言い方も、一面では日本の伝統への回帰なんです。決して、大工は大工の作品なんかつくらなかった。それは、だから、その人たちが生きてく世界をつくろうとしたわけで、あるいは暮らしてく世界をつくろうとしたわけで、しかも昔の家は、別に完成なんかないわけで、時には増設もされていくし、時には改修もされていくし、あるいはそういうことを絶えず繰り返しながら、家族というのを軸にしたコミュニティの場であり続けた。そういう伝統のあり方みたいなものに、どこかで今、戻ろうとしている。そういうことなので、他の国のかたにはちょっと理解しにくい話になってしまった。

ですから、三・一一以降ってのは、こういうようなことで、今言ったように一面では伝統回帰って言葉を使っても僕はいいと思つてますけども、そのことをどこかに持ちながら新しい試みが進んでいくという、そういう時代なんだらうっていう気がいたします。結局、その中で払拭されようとしているのは、戦前の日本が、あるいは戦中の日本がといたらいいかもしれませんけど、おおよけという公の部分と国家の部分、それを同一視してしまった。だから、みんなのためにという生き方が、結局、国のためとなり、あるいは天皇のために死ぬことが一番、国のためになるという、それがみんなのためでもあるみたい、そういう時代をつくってしまった。

戦後になってくると、このことが、しまった、つまらないことにだまされて損をしたっていう話になってきて、国と公の違いを明確にすることなく、結局滅私奉公したみたいになって、われわれは多大な被害を受けて損してしまったという、そういう総括で終わっちゃった。そのために、国家的なものから距離を置くことが、公的な生き方からも距離を置くという形になって、つまり公の人間として生きていくという、その部分も捨て去らしてしまった。

それは結果としてガリガリの個人主義をつくってしまったわけで、いわば自分のことしか考えない人たちを大量に生み出すことになった。

今、若い人がたなんかとお話をしていると、皆さん言うのは、若い人から見ると五十、六十でも年寄りですから、僕も年寄りの一人になっちゃいますけども、今の年寄りたちってのは、なんであんなにエゴイストなんだという、そういう気持ちがあるものすごくあって、結局それが、だから一面では戦後を生きてきた人たちっていうんですか、つまり戦時中の公と国みたいなもの、あるいは公と官みたいなものが一緒になってしまった時代を経て、結局それを全部捨ててしまつて、共に生きる世界を決して持とうとしなかった、自分だけのことを追求してしまつた、こういう時代もまた終わりにしていかなければいけないという気持ちに、今、だんだんできてきたという気がしています。

実際僕は、地震が起きた日なんですけど、僕は東京のほうの自分の家において、そしたら地震が起きました。それで、僕も慌ててテレビをつけてみたりしたら、大変なことがだんだん起きてくるということだったわけですけども、そのときに一つ非常に感心したことがあって、それは僕の勤めている、立教大学の学生さんなんですけど、そのかたからメールが入った。それは、おそらく自分の知ってる限りのところに一斉メールを出したんじゃないかと思うんですけども、どういう内容だったかと言うと、ワンルームマンションに住んでる男性の学生と思われる、僕はちょっと誰かよく分かんないんですけど、そのかたのメールは、自分の住んでるワンルームマンションと思われる場所が示してあって、それで、「どなたでもいいからお泊りください」という、そういうメールです。

それが夕方の六時過ぎぐらいに入った。つまり地震が起きて、これはえらいことになったと、しかも津波の映像を見ることになって、と思って、しかも電車が止まった当日、帰宅困難者とかいっぱい出てきたわけですけども、そういう事態を見たときに、六時過ぎぐらいの段階で、「そうだ、僕のうちを開放しよう」と。確かにそうすれば、お布団なんか多分ないでしょうけども、少なくとも外をうるついているよりはいいわけで、そういうふうには思いつく人が

いた。そのかたからは、三十分ぐらいのうちにまたメールが入って、「もうすでに泊まるっていう人が二、三人いますから、どうぞおいください」と。多分、これは男性が一人暮らしたと思われ、女のかたがもし泊めてもらおうと思っても、自分一人になったらちよつとまずいかなみたいな気持ちがある人がいるだろうということを想像して、だから、「もういるから大丈夫ですよ」ということを追加メールで打ったんだろうと思います。

そういうことを機敏に反応するっていうんですか、そういう人たちが今の若い人たちのほうにいるっていうのは、やっぱり驚いてしまったりします。実際、今、東京も、いつ東京震災みたいなものが起きるか分からないし、何があっても不思議じゃないのが日本の社会ですから。と、かなり多くの人たちが、ちよつとは防災対策のようなことをして、当座のものを用意してある。そういうかたが大多数です。「どうしてそれやってんの？」と質問しますと、やっぱりこれも世代間によって完全に答え変わります。上のかたは、「とりあえず自分の身は守らなければいけないから」という、これもしごく当然な答えなんですけども。

若い人たちはどう言うかと言うと、「自分の身ぐらい守るもの持つてないと人助けができないから」という意見が強いですね。つまり、そのとき、自分も何も持つてないと、自分も自分のために右往左往しちゃうわけです。そのときに、「とりあえず自分はしのげる態勢になってれば、人を助けるほうに回れる」と言うんです。だから、震災が起きたときには、どうやったら、助けられるほうに回るんじゃないかと、助けるほうに回れるかということ、皆さん非常によく考えていて、もちろん何かの下敷きになれば助けてもらうんですけども、できるだけ助けるほうに回りたい。であるならば、ちよつと家の中の物も倒れないようにしておいたほうがいいし、それから数日間ぐらいの水ぐらいは確保しておいたほうがいいし、そういう感じで防災グッズを用意してる。結構、若い人、今、そういう人が多いです。

だからこういう点でも、本当に今、言葉としての、「利他的な生き方」という言葉がやる時代なんですけども、

つまり、人々のために、他の人々のことを考えながら、あるいは他の人々だけではなくて自然のことも含めて考えながら、そういうことを第一に考えながら生きていくことが、結局自分の幸せをつくっていくという、そういう式の考え方が今、広がってきてるのが現状でもあるって気がします。

そして、また、今、人々は、これはバブル崩壊からもう二十年以上がたってますから、若い人たちが昔と違って、あまり安定した職場がない、そういう時代の中で、どうやって共に生きる経済をつくっていくかということに対するいろんな模索がある。これも言葉で言うと、ソーシャルビジネスって言葉になってくるわけですけども、つまり自分が生き残る経済ではなくて、みんながやってける経済っていいですか、共に生きる経済、そういうものを模索する動きがあつて、これもまた津波以降、ずいぶん広がってきたという感じがいたします。

だから、三陸地域の経済を復興させながら、一緒に生きていこうという、経済的にも寄り添って一緒に生きていこうみたいな、そういう経済のありかたを模索する動きが進んできてる。僕自身は、三・一一以降、被災されたかたには、ちょっと言いにくい言葉ですけども、実はちょっと元気になっていて、それはなぜかと言うと、どういう方向でこれからの社会をつくっていくのか、ちょっと見えはじめたという。そこには自然と人間、人間の生者と死者っていう、そのつながりをどういう形でもう一度回復したらいいのかということもあるし、それから共に生きる経済をつくるとか、そういうことの具体的な姿もちょっと見えはじめたっていう、そういう点では、いろんなものに勇気づけられてるという気がしています。

ですから、今回は、皆さん感じてるように、単に原発でもないし、単に津波でもない。このことを一つのきっかけにしながら、私たちの生きてる社会を根本から少し作り直していくという、それは大変長い時間かかるかもしれないけども、根本からつくり直していくということをしていかないと、いけないんじゃないかという、そういう気持ち広がっているというのが、今でもあります。だからこそ、いろんな根源的な問題を振り返ってるっていうのが今

日のような気がしています。

ちよつと、予定より長くなっちゃったんですけども、これでいっぺん話を終えたいと思います。長い時間、ご清聴ありがとうございました。

司会 まだ予定時間が四分あったんですが、ありがとうございます。では、質疑応答に移らせていただきます。またも存じます。どなたでも結構でございますので。ご遠慮なく挙手をしていただいて。はい。じゃ、木村上人。

木村 先生、自然からの災難、また、この死者という問題。先生は、この死者の問題について、当然のことだと思えますけれども、この第二次世界大戦、ユダヤ人の六百万人のアウシュビッツで死んでいった人たち、また、日本で言えば、約四百万からの陸海軍あるいは空襲で亡くなった人たちの死者の問題、そして生きて残った人たちの生者の問題、こういう問題と、先生がおっしゃっているこの文明との関係といったようなものについては、何か考察なさったことがございますかということでございます。

それからその建築の問題ですが、このようなロイヤルホテルで今、会議をやっておるわけですが、私どもは大変素晴らしいものだと思っております。それが作者個人ですね、ものを奨励されているせい、建設家はみんな賞をもらいために設計をして、またそのような方向ですべてを規制していくというふうな傾向がございますが、その、いわゆる賞を出す、そういう人たちのものの考え方というのはどうなってるか、先生がご存じでしたら教えてくださいませんか。その二点でお伺いします。

内山 今、おっしゃられた、例えばドイツの問題にしても日本の問題にしても、この生者と死者の問題というのを、

僕は、どちらの国も、やはりきちつと解析をしなかったというふうに思います。よく、ドイツは戦後、ユダヤ人虐殺について大変厳しい反省をして、またいろんな補償とかそういうことも含めて、非常に真しに向き合ったけれども、日本の場合には、この問題に対しても、適当にお茶をにごしたっていいですか、みたいなことがよく言われるんですが、私はどちらも、実ははじめにはやってないというふうに思っています。

というのは、どうしてかと言うと、確かにユダヤ人に対しては、あれで十分だったかどうかは分かりませんが、自分たちの責任を自分たちで裁き、ある程度の補償もするという態度をとった。だけどあれはあくまでユダヤ人に対してのみなんです。あの戦争の中で死んでいった、アフリカのかたとか中東のかたとかですね、ドイツってのは、当然ながら三D政策でバグダッドへ向かって進撃していくわけです。そういう過程の中で、やっぱりいろんなかたが命を落としてる。それに対して、では反省をしたり補償をしてきたのか、全くしてないわけですね。

つまり、やっぱりここにはヨーロッパ主義ってのがあって、結局、ヨーロッパ人がヨーロッパ人を殺したということに対する、ざんきの念に耐えかねるみたいのがあるわけであって、決して普遍的にこの戦争という問題などを解析したとは、僕には到底思えない。ですから、よくドイツを礼賛して日本を批判するっていう人がいるけれども、僕は決して、そういう気はしない。もちろんそれは、日本においても、その戦争責任の問題なんかも含めながらこれは、きわめて不十分にしかやらなかったというふうに言ってもいい。結局、それはだから、東京裁判という形で、戦争に勝った側が裁いていくということしかやってないわけで、ですので本来で言うと、東京裁判そのものは、勝ったほうが負けたほうをかってに裁いてるわけですから、僕自身、あんなもの無効でいいと思ってる。

それは戦犯になった人たちが正しいと言ってるわけではなくて、本来やはり私たちが裁くべきだったということなんです。日本人の手で裁くと。別にそれは絞首刑にするとかいう話じゃなくて、やっぱり自分たちで戦争の責任を問いた다는ことによって、それは、積極的にトップに立って裁かれる人もいるかもしれないけど、そのときに、むしろ

被害者になっていったような末端のわれわれっていいですか、そういう人間たちもまた、この戦争過程において、どういう、やっぱり責任があったのか。別にそれは懲役とかいう話じゃないんだけれども、やっぱりそういうことも含めて、やはり気持ちをきちっと整理していくという、そういう作業を全くしなかったのが、やはりこの問題に、僕は決着がつかなかった一つの大きな問題であるうし、その後もいろんなことを外国なんかから投げかけられるたんびに、何かその場のぎでいくつていいですか。結局、それはだから、この戦争の問題がきちっと解決できなかった。それが結局、そうであるから、戦争の被災者っていうか亡くなったかたがたと私たちはどうつながりながら戦後をつくるのかみたいなことも、個々人の気持ちの中には、ある人はもちろんあったでしょうけれども、この社会として、それを社会化することができなかったわけです。それがまた、いろんな問題を起こしたという気がしております。

ですから、その点では、私は、本当は今からでもわれわれの手での戦争の責任を裁く。だから、今からですから、別に懲役何年などやらなくてもいいですから、きちっと、その点では気持ちに責任を負うという、それをやっていかないといけないんだという気がしています。で、おそらくそういうことをきちっとしないから、諸外国から絶えず文句をつけられるという、そういうことも起こってくるのだろうっていう気がいたします。

もう一つの建設のほうも、確かに建設したのは、有名な建築家たちってのは、絶えず、例えばこういうホテルを造る場合でも、何人かの建築家たちが設計図を出して、それでコンペを開いて、それで選ばれていく、そういう形をとることが多い。ですので、そのコンペに勝ち抜かなきゃいけないわけで、そうすると、本当に自分のコンペに勝てる作品づくりをする、それで生きてきたのが、いわば有名な建築家たちっていうふうに言ってもいい。

そこで、いろんな賞なんかも出てきたわけですけども、結局この賞ってのは、あらゆる賞がそうですけども、その時代の流れみたいなのがあって、その時代には、何かそれがいいとされる、だからそこで選ばれていたりするわけですが、やっぱりこういうものを相手にしちゃだめなんだと思うんです。もちろんくれるっていうんならもらっても

いいでしょうけれども、そんなところに目標はない、今、いろんな建築家たちが考えてるような、むしろ、風土とは何かとか、人が暮らすとは何かとか、あるいはそこにコミュニティが生まれるとは何なのかとかそういうことを共に考えながら自分の持つてくる技術を提供する。それが建築家でなければいけないだろうという気がします。それは、賞をねらってコンペに勝ち抜いていくような、そういうものではない。

ですので、僕は建築について言うと、建築家たちの世界は、この十年間あるいは、そういう動きが出始めたのは二十年ぐらい前からですけどね、ずいぶん変わったというふうには思っています。だから、自分の作品づくりにまい進してきた建築家たちが、少なくとも建築家の世界では目標ではなくなりました。そういうふうな変貌があったというふうな気がしています。

司会 はい。ありがとうございました。

もうひとかただけに、すいません、限らせていただきます。どなたか。あ、じゃ、所長さん。はい。

小林 福島の小林といいます。

先生、ありがとうございます。今、もうご存じのように福島は渦中の中にありまして、今日のお話の中で、やはりわれわれが直面してる問題がたくさんある中で、少しでも、ともしびが見えるのではなからうかというふうなお話しいただいて、ありがたいな思っとるおるわけでございます。質問とか何かではなくて、やはり直面しておる供養の中でのご遺骨の問題とか、ま、東北三県、もちろん今後のまちづくりなど考えていかなければならないところがたくさんあるんですけども、自然とわれわれと、今のお話のように建物とか、いろいろな面でのように関わっていくかという中で、特にまた福島の場合ですと、仮の町構想なんていうようなことも出ておりまして、そのような中で、先

生がおっしゃっておる、いかにわれわれがつながりをもって生きていくかというようなコミュニティの問題ですね、そういうことも踏まえながら貴重なお話を拝聴できましたこと、まことにありがとうございます。また、これを基にして、これからの分化会とか、また地元に戻りながらも、また今後、考察してまいりたいと思っております。本日は本当にありがとうございます。

司会 内山先生、今、発言されましたのは、日蓮宗の福島県の宗務所長さんでございます。はい。何か、コメントがございましたら。

内山 特に、原発に比較的近い地域が本当にこれからどういう道を行くのか。僕自身は、例えば、日本における定住とは何かも考え直さないといけないと思っております。代々ここに住んでいるという、あの感覚が定住観をつくりだしているのですけど、それをよく調べてみると、意外と中に移動性を持つて定住なんです。例えば私の村でもそうですけども、お墓を見ると、平安時代ぐらいから少なくとも住んでいたと思われるうちもある。でも、江戸の末期ぐらいにかなり新しい人が入ってきていて、それから明治時代にまたかなり入ってきてるんですね。その間に当然出ていった人もいます。

そういうふうな意味で、日本の社会って、戦後の開拓地とかそういうのは、もちろんですけれども、安定した定住地域っていわれながら、意外と中では移動するというのが行われていたのです。例えば、同じ福島でも相馬のほうの地域になってくると、幕末の近くの大ききんのときに、富山県の農民が相当入ってきて、あそこは浄土真宗つながりだと思っんですけども、浄土真宗の多いところなもんだから、そこに、今で言うところのボランティアで来たっていいですか、そのままそこに定住しまう、そういう感じがあつたりして。ですから、そういうことも含めて日本の定住社会

はできてきた。僕は定住という言葉の意味は、何代住んでるとか、そういうことではなくて、たとえ一代目であったとしても、そこに何か自分の生きてる永遠の世界があるように感じたとていうのが定住の意味で、だから僕は上野村の定住居意識があつて、つまりここに僕の永遠の世界があると感じるっていう。とすると、移動をってしまったらすべてが壊れるというふうには、考えないほうがいい。

それから、例えば、昔は養子さんつてのも多かったですけれども、結婚されてくる奥さんがたは、ご近所からくる場合も昔だからありますけど、意外とちよつと離れたところから来たりしてるわけです。そうするとそのかたは、全く新規入植みたいなものなわけで。だけでもそのまま新規入植でその家に来た、昔だから本当に家に来るという感じで来たわけですけど、だけでもそこで数年なり、数十年なりを過ごしていくうちに、本当にその人になりきつて、ここが私の永遠の場所だと感じるようになっていく。結婚という形式でもそうだったと思うんですね。

だから、そういうように考えていくと、各家々の半分の人はず外から入ってきたというふうに言ってもいい。ですので、そういう移動性を持ちながら定住していくというのが日本の定住社会だというふうには、きちつと読んでおかなければいけないと思っています。

そうすると、特に放射線濃度が濃い地域になってくると、どうやっても当面住むのは難しい、少々除染したとしても難しいという問題が出てきてしまうので、であるならば、どうしても移動はせざるをえない。そうすると、移動をするときに、何のための移動なのかということが明確になっていけばいい。定住社会だけどそこに移動性があつたという、その意味をきちつと踏まえて、ある移動先をつくるということだったらいわいで、それがバラバラに移動されてつてしまうということになると、それはただの崩壊になる、そのへんの違いをどう見極めるかということでもあるし、それから、やつぱり特にお年寄りたちが、どうしても帰りたいみたいない気持ちをもつ。ガイガーカウンターで計ってみると、これは無理だつて分かつてても、気持ちはやつぱり帰りたい。

結局そのときの帰りたいつてのは、自分は移動することができなければならないという気持ち
が非常に強い、そうするとご先祖様との縁が切れてしまうみたいな気持ち。結局そういうことも、そういう気持ちを
持ちながら生きている人たちのありようっていうものをきちっと見て、あるいは知って、そしてそれが移動したとし
ても、亡くなった先輩たちとの関係は切れることがないんだという、そのことをどこで保証できるか。結局そのと
ころでは、おそらくお寺とかそういう世界が頑張らなければいけない領域が出てくるはずなんですけども、どうい
う形で引越した場合には、ご先祖様を見捨てて出てつたみたいなの、そういう気持ちにならないですむのかという、そ
ういうこともふくめて、コミュニティをつくる、生きる世界をつくるってことが、日本の場合はとても大事になってく
る。だから、移動しちやいかんとか、逆に、戻つたらいかんとかいうことだけ言ってるんじゃないわけで、その
あたりを全部踏まえて、これからやっていく必要があるだろうし、それはだから、その現場にいるかたがたの問題
だけではなくて、それを応援していけるような仕組みをこの社会が持つていなければいけないと、そういうふう
に思っています。

司会 はい。ありがとうございます。まだまだご質問も尽きないことかと思いましたが、最初予定していた時間が
まいましたので、これをもって内山先生の基調講演を終了とさせていただきます。静かな口調の中に大変示唆に富
んだ刺激的なお話をありがとうございます。もう一度盛大な拍手をお願いいたします。

はい、それでは記念写真の撮影に移らせていただきます。今の、セッティングをしてもらいますので、皆さん、
このあと各々の分科会の会場に移っていただきますので、移動ができる支度をしていただきながら、ちょっとお待ち
をいただければと思います。